令和２年度第１回前近代小部会議事録

日　時：令和２年８月 26 日（水）15:30～17:30
場　所：かでる２・７　510 会議室
参加者：谷本小部会長、川上委員、越田委員、蓑島
委員、中田委員、松本委員、
道史編さん室（靏原、杉本、伊藤、和田）

１　開　会
谷本小部会長あいさつ
２　議事
（１）国立アイヌ民族博物館におけるアイヌ史展示の考え方について
①　講義
国立アイヌ民族博物館　館長　佐々木史郎　氏
国立アイヌ民族博物館研究学芸部展示企画室長　田村将人　氏
国立アイヌ民族博物館研究学芸部研究交流室研究員　鈴木建治　氏
国立アイヌ民族博物館設立推進調査官　永野正宏　氏
（順不同）
②　質疑応答

（２）時代区分について

（３）その他

３　閉　会

1　開　会

〇谷本小部会長

・令和２年度第１回北海道史編さん委員会概説部会前近代小部会を開催します。
本日は、国立アイヌ民族博物館の先生方にいらしていただいた。国立アイヌ民族博物館におけるアイヌ史展示の考え方についてレクチャーいただき、小部会との意見交換をさせていただく。

・少し長くなるが、このような場を持つに至った趣旨を説明する。
今回の北海道史の編さん事業は、戦後史が主になるが、それとは別に『北海道クロニクル』という概説編を編さんする。北海道史の編さん事業や方針に関しては、添付した機関誌「北海道史への扉」に書かれているので、後でご覧いただきたい。

・概説編が計画された背景には、『新北海道史』の前近代の叙述が、先行する『新撰北海道史』や『北海道史』の枠組みを踏襲したため、開拓前史の位置付けがなされていないという批判があり、これにどう答えるのかということで概説編が企画されたと理解している。

・『新北海道史』第２巻（通説１）の第１編が「松前藩成立まで」という時代区分になっており、第１章が「先史時代」で考古学的な叙述、第２章が「アイヌ」という章で、民族学的・文化人類学的な叙述、第３章が「和人の渡道」で、主に和文資料に立脚した文献史学的な叙述に繋げている。

・『新北海道史』の考古の部分を指導・校閲された大場利夫先生は、その後著書『北海道の先史文化』で、「北海道には先史文化の伝統を受け継いだアイヌ民族が残存している」という理解を示しており、その年代観は当時の常識だったと思う。
『新北海道史』は、まず先史という考古学があり、その後に文献で書けるところの歴史、日本史でいう古代から近現代が来るけれども、並行して先史の「残存」という形で、考古学的なアイヌ文化の時代から近世・近現代のアイヌ民族を描くという構図が見て取れる。つまり、中世以降のアイヌ史を先史の「残存」として捉え、「和人の渡道」以降が歴史で、歴史の主語は和人であることが前提になっている。

・北海道史の編さん事業、とりわけ概説の前近代史を考えるに当たっては、どのような時代区分とするかというのが目下の課題。部会では、『新北海道史』の時代区分をそのまま流用するのは難しいという認識は共通しているが、ではどうすればよいかという問題がある。そこで国立アイヌ民族博物館の展示叙述のコンセプトを伺い、事例として学びたいとお願いしたところ、快くご了解くださった。

・具体的には、４つほど学ばせていただきたい。１つめは、アイヌ民族の視点で「私たちの歴史」という切り口で語る展示構成の意義について、２つめは、「９～13世紀におけるアイヌ文化の成立」といった通説的な理解ではなく、通史的な継続に基づく年代観を採用したと伺っているが、その意義について。３つめは前述の２つのコンセプトに基づいた、国立アイヌ民族博物館の展示叙述の実際について。４つめは、アイヌ史あるいは「私たちの歴史」と、北海道史との対話の可能性について、ご意見、ご見識を伺いたい。
本日は、どうぞよろしくお願いします。

２　議　事

（１）　国立アイヌ民族博物館におけるアイヌ史展示の考え方について

○佐々木館長

・国立アイヌ民族博物館の佐々木です。まず職員の紹介をしておきますが、田村将人展示企画室長、研究交流室研究員の鈴木建治、文化庁調査官の永野正宏です。当館の歴史展示は、おおよそこの３人が中心になって検討してきた。基本コンセプトは、「アイヌ民族の尊厳を尊重し、アイヌ文化の振興と新たな創造を目指す」というところにあり、「アイヌを主語に進める」という姿勢は、基本構想以来一貫している。

・基本展示を構成している６つ、「ことば」「世界」「くらし」「歴史」「しごと」「交流」に、いずれも「私たちの」という修飾語をつけているのは、旧アイヌ民族博物館の人たちや、他の地域で文化伝承活動をしてきたアイヌの人たちの声を尊重し、その視点で展示を作ろうとしてきたため。アイヌの視点で歴史を構成するという考え方で、私たちも努力している。

・アイヌ出身の歴史学者や考古学者が多数参加していただくのが理想だったが、現実はそれほど多くの方が歴史学や考古学に従事しているわけではないので、関係するアイヌ民族出身の研究者から意見を聞くという形で、我々非アイヌ系の研究者が､できるだけアイヌの人たちの視点に立って資料を読み直し展示を構成した。

・「アイヌ民族の古代」「アイヌ民族の中世」とは何かと言う定義がまだきちんとない状態で、慣れ親しんでいる先史・古代・中世という時代区分をそのまま当てはめるには無理があった。そこで、時間軸に沿って時代を区切るのではなく、「歴史を知るための材料」で区切る方法を選んだ。①考古学的な遺物から知ることができる歴史、②アイヌ民族以外の人たちが残した文献資料によって知ることができる歴史、③アイヌの人たち自身が書き残した歴史、④今のアイヌの人達が記憶している歴史、の４つに分けた。

・考古学的な遺物から知る歴史は、日本の歴史でいうと後期旧石器時代から鎌倉・室町時代ぐらいまで。文献資料からは、平安時代末期から江戸・幕末ぐらいまでをカバーする。アイヌの人達の記録・記憶は、幕末から明治～戦前くらいまで。今のアイヌの人たちが知る歴史は戦後をカバーする、という形になっている。

・歴史展示は、「私たちの歴史」というコーナーだけでなく、その後に続く「しごと」と「交流」のコーナーも、事実上の歴史展示になっている。「しごと」は、伝統的な狩猟・漁撈の展示に続いて、明治・大正・昭和・平成の時代の仕事の変遷で、個人に焦点を当てた。「交流」の部分も、過去の他民族との交流から、現代の他の先住民族たちとの交流まで、時系列に展示している。

・では実際に考古学遺物はどう使ったか、文献資料はどう使ったかということを、それぞれ担当した研究員から説明する。

○田村室長

・先ほどお配りした来館者用のパンフレットを開いていただくと、展示の配置が出

ている。「世界」「ことば」「くらし」「歴史」「しごと」と６分割されているが、そのうち「ウパシクマ」とあるのが「私たちの歴史」。

・ウポポイ全体でアイヌ語復興の拠点となるという動きもしてきたので、表示の第１番目にはアイヌ語を表示した。例えば、「現在に続く私たちの歩み」という中テーマタイトルは、アイヌ語にすると「チコロ、ウパシクマ」。続いてまずアイヌ語の解説文を書き、アイヌ語・日本語・英語・中国語・韓国語の順に示している。

・既存のアイヌ語辞典に載っている場合はそれを採用したが、辞典に載っていない場合は､外部の有識者の先生や各地のアイヌ語の実践者に委員になっていただき、２年半ほどかけて検討した。アイヌ語には様々な方言があるので、どの方言に基づいて誰が書いたのかが分かるように、名前と方言名も書いている。アイヌ語にはいわゆる共通語、標準語が存在しないので、学習者や実践者が執筆する際に選んだ方言で書いており、ある意味多様な表示。

・日本語全てをアイヌ語に逐語訳するのは無理。解説文に関しても、研究職員が下書きし、アイヌ語の解説を書きたいと応募された方が翻訳し、まず「アイヌ語で表現するとしたらこういう雰囲気の文章になる」というものにして、さらにアイヌ語から日本語に直すというプロセスを経た。今後、アイヌ語表記を順次増やしていきたい。

・配付した資料は、平成 28 年５月に文化庁がまとめた、国立アイヌ民族博物館の展示計画から、歴史に関する方針を抜粋したもの。展示の基本的な考え方や展示手法、各コーナーのストーリーを示している。

・アイヌ民族がかつて暮らしてきたのは、現在の日本国の範囲にはとどまらないので、「日本とアイヌ」という視点だけではないというところは、展示計画をまとめる段階から、展示検討委員会やワーキング会議で考えられてきた。そのメンバーには､いわゆる和人の研究者や学芸員もいるし､アイヌ民族の研究者や学芸員、工芸家の方なども含まれていた。非アイヌが展示の内容を構成するにしても、展示検討委員会の中で、常にアイヌ民族の多様な意見を受けて洗練されていったと自負している。

・旧石器時代から取り上げるのは、展示検討委員会やワーキング会議でも共通した意見。「どこからがアイヌ民族か」という問いにはそもそも答えないし、それを提示することはこの博物館ではやめようということになった。いわゆるアイヌ民族が居住してきた地域を、人類の歩みが始まった段階から取り上げ、そこから一本の民族の系譜に連なるということも説明せずに現在に流れるという展示構成とした。民具だけを展示するのではなく、様々な資料を活用し、アイヌ民族の歴史文化、言語を含めて広く展示する手法。

・大テーマのうち、歴史に関係する３つについてご説明する。

「４　私たちのしごと」では、これまでの他の博物館のアイヌ民族のコーナーにみられるような、弓矢などの道具だけを展示するのではなく、明治以降に様々な職業に就くことになったことを紹介している。民族衣装を着て舞踏などを紹介するのも「しごと」であるし、農業や漁業に従事した人もいるし、俳優の宇梶さんを紹介したり､マレーシアでフェアトレードをやっている人を紹介したりしてい

る。

・「５　私たちの交流」では、場所請負制などで縛られる前の交易活動を紹介。基本展示全体はアイヌ民族「私たち」を主語にした展示であるが、アイヌ民族自身が残した記録がほとんどない前近代の時代は、資料が著しく少ないことになってしまう。考古学的な遺物で歴史資料を補うことも考えたが、アイヌ民族への関心が高まった 17 世紀以降の欧米や日本からの視点はやはり無視できないと、「外から見たアイヌ文化」という中テーマを設けた。明治以降の博覧会に連れて行かれた、もしくはそこで稼いできたということと、その後観光地で踊ったり言語を披露することが、同化政策で失われた言語や文化を取り戻すことにつながったことも示している。

・「６　私たちの歴史」の展示ストーリーでは、展示計画の段階では「３つの中テーマを設け」とあるが、近現代を 1945 年までと 1946 年以降とに分け、最終的には４つの中テーマになった。

・ここまでが、「私たちの歴史」や基本展示の中の歴史に関する展示の骨格をなす部分の平成 28 年段階の構想で、その後永野・鈴木と一緒に解説文などを書いてきた。

○鈴木研究員

・考古学資料を展示資料として使ったときの課題についてお話しし、アドバイスをいただきたい。考古学に関して最初に私たちに課されていたのは、①旧石器時代からアイヌ史を扱うことと、②「アイヌ文化の成立」「アイヌ文化期」という言葉を避けること、通史を描くこと、展示資料をどう見せるかということ。

・私が意識したのは、これまでの北海道史の形を、少しでもアイヌ民族の歴史に近づけたいと、解説の中に北海道、樺太、千島、東北北部というアイヌ民族が居住していた・居住している地域を意識的に書こうとしたこと。ただ今回の展示では、樺太・千島の資料を置けていないので、今後の課題。

・「13 世紀からのアイヌ文化の成立」という言い方を避けるために、時代区分をしなかった。スライドには括弧書きで「オホーツク文化」とあるが、これも初めは書いていなかった。しかし、これまで勉強してきた人たちにこれは不親切だろうという内部の議論もあり、括弧書きで、時代区分とは違う○○文化という形で提示した。

・○○時代、○○文化期と使うと、その時代がある程度具体的に想定される。それをあえてせずに、具体的な数字で表した場合、その数字の妥当性について現代の研究でどこまで言えるのかということが課題になってくる。今後、今までのような時代区分を新たに作るのか、今までのものを踏襲するのか、はたまた使わないのかは、今後の研究や先生たちからアドバイスをいただき、検討していきたい。

・中世以降の資料は墓から出てくることが多いが、どこまで遡れば埋葬品・副葬品を展示してよいのかも難しい課題。

○永野調査官

・展示概要について説明させていただく。大テーマ「私たちの歴史」の下に４つの

中テーマを設定し、さらに小テーマが時代順に並ぶ。例えば私が担当した中近世では、「交易圏の拡大と縮小」という中テーマを置き、小テーマでは「津軽安藤氏と和人勢力の北上と拡大」がある。

・当館の歴史展示の特徴としては、壁ケースの手前側に、展示台から突き出てくるように年表がグラフィックを使って２種類貼られていること。

・中テーマのタイトルは最初「アイヌとシサㇺ」というタイトルだった。しかし実際どういったことがあったのかを見て行くと、やはり交易、仮に北海道を中心に考えたとしても、アムール川下流域・カムチャツカ・千島・本州以南のそれぞれの地域で、隣接する民族と交易しながら文化を育んでいったことがまず言える。それが和人勢力の進出で江戸幕府・松前藩によって次第にその交易範囲が狭められていったというのが、日本史でいうところの中近世のアイヌ史の主たるところ。それで中タイトルを「交易圏の拡大と縮小」とした。

・その中で北方史の出来事を紹介していくわけだが、手法はあくまでもアイヌ＝私たちということなので、アイヌの視点で一番重要と思われる項目を考えて組み立てていった。例えば場所請負制はどうしても避けては通れないが、「場所請負制の関係図」という書き方ではなく、「アイヌが和人と交易する関係図」として説明している。置き換えになるかもしれないが、意識したところ。

・近現代史の展示では、アイヌの特定の人物に焦点を当てて説明をしているが、開館後の来館者を見てみると、やはり人物が注目されており、今後中近世でもこういった展示ができないかと考えている。

〇田村室長

・私が担当したのは、３つめと４つめの中テーマで、いわゆる明治以降の近現代史。文字ばかりで大丈夫かという不安はあったが、人物の紹介のところは結構熱心に観覧してくださっている。オーラルヒストリーの要素も加味し、コラム的な展示も設けることで、計画にある「アイヌ史の豊かさ・多彩さを示す」というところを実現できたと思う。

・人物に関しては、北海道アイヌに偏らず、千島アイヌ、樺太アイヌ、北海道アイヌの明治初年ぐらいに生まれた方をまず紹介し、その後はなるべく地域をばらけさせた。男女もなるべく均等にしたかったが、男性の方が情報が多いこともあり、男性が多くなっている

・同化政策による生活の影響という観点では、パネルで鮭漁・鹿猟の禁止や北海道旧土人保護法の制定を紹介しているが、「私たちのしごと」のコーナーでも人物と職業紹介をしている。そちらでは職業があっての人物、農業をしていた誰々さんという紹介だが、「私たちの歴史」の展示では、例えば旭川の荒井源次郎さんがどういう履歴をたどったか、という形で 11 名を紹介した。いずれも教科書に出ているとか、アイヌのことを少し本で読んだことがあれば、名前を聞いたことがあるような、いわば有名人を取り上げた。

・同化政策の影響については、母語としてのアイヌ語が家庭内で受け継がれなかったということもパネルにした。来館者の反応としては、同化政策のことは書いてはいるが足りないという意見もあれば、真逆の意見もある。

・原始、古代、考古、中世という言葉を一切使わなかったが、展示資料の手前に年表を横に走るように並べているので、来館者はどのあたりの時代を見ているかが分かるようになっている。ちょっと気持ち悪いという感想を持つ人はいると思うが、年表がずっと資料の前に走っているというのは統一した。
・古い時代になるほど、記録者はアイヌ以外の和人、ロシア人や中国人になり、そちら側の文献によることは仕方がないが、明治以降では、同化政策や法律の制定を除きアイヌ民族の独自の動きをなるべく取り上げた。
・当館の展示は、北海道史の枠からは大きく外れていると思う。樺太や千島のことも取り上げているし、ごく一部だが東北のことも地図の中で取り上げた。あくまでもアイヌ民族がどうしたかということを取り上げたので、一部のネットでは、和人が行ったこと、政府がしてあげたことが書かれていないというような極論も見られる。

〇谷本小部会長
・丁寧なご解説とレクチャーをいただきありがとうございました。これから意見交換ということで、私どもの方から一人ずつ、感想あるいは質問などを伺う形でよろしいでしょうか。順番は時代順に、考古学担当の越田委員からお願いします。

〇越田委員
・時代区分でアイヌ文化期というのをやめるとすると、それ以前の時代はどう表現しているのか。旧石器文化、縄文文化、続縄文文化、擦文文化、先ほどは括弧書きでオホーツク文化としたというお話だったが、どのように使っているのか教えてほしい。

〇鈴木研究員
・時代区分の名称を使わないということになっているので、本館では旧石器時代や縄文時代、〇〇文化期という言葉は使っていない。
・キャプションがずらっと並んで現在につながっていくが、トピックになるといきなり時代が変わったり、あるいは今まで勉強してきたものが何も記されていないと気持ち悪いということがあるので、括弧を付けた「〇〇文化」という形で書いている。

〇越田委員
・「その人たちがどこから来たのか」ということは、どの程度までやられるのか。

〇鈴木研究員
・北海道の考古学に関して大きなポピュレーションがガラッと変わるということは少なく、オホーツク文化がアイヌ民族にとって大きなインパクトだったのではないか。ただ異民族がいて「私たち」とは違うとすると、その異民族ではない民族の根幹は何かということになる。そこが一番難しく、今後も考えていかなければならないと思う。

〇越田委員
・旧石器、縄文、続縄文、擦文、それでオホーツクが別なのだとすると、アイヌの人はどこから来たのかという質問が必ず来ると思う。歴史を書くのは「私たち」とは言っても、北海道だけの歴史とは何なのかというところ。私にも答えはない

けれども、北海道史を書くときにそこの時代区分をどうするかが一番難しくてぜひ伺いたかった。

・文化人類学・形質人類学・移民史関係の説明はどの程度までされているのか。

○田村室長

・展示室でお客様から聞かれた時には、「今回の展示では、形質人類学とかＤＮＡの解説はしていない」と答えている。また「アイヌ民族の起源はどこか」という質問にも、「和人の起源も分からないかもしれない。島国だから分かりそうな気がするかもしれないが、大陸とかヨーロッパに行くと、一つの国の起源や民族の起源ということすらはっきりとは言えません」と話す。たいていの人はだまされたような顔で立ち去るが。

・ウポポイの構成の中に慰霊施設があるため、博物館が遺骨をもって研究するのはいけないという誤解に基づく運動が開館以前からあった。そのことだけではないが、形質人類学やＤＮＡに関する解説は一切ない。

・アイヌ文化期という言葉を使わなかった大きな理由は、12～13 世紀頃から 19 世紀までをアイヌ文化期だと言った場合、アイヌ民族が突然そこで現れて突然消えているという印象を持たれる。そこでアイヌ文化期というものを使わない歴史叙述に挑戦してみた。

　先住民族の定義やアイヌ民族への保障に関心を持つ方は、「アイヌ民族が 13 世紀ぐらいに出現したのであれば､先住権を主張してもそこまでしか遡れないし、縄文人や旧石器人は和人の祖先でもあるので、和人が先住民族である」という戦法で展開されることが最近多い。そうすると、先住民族ということを表現する意味がなくなってしまう。用語の問題は民族の定義と大きく関係するので、正解だったかどうかはわからないが、アイヌ文化期という言葉を使わないでとりあえず動いている。

○中田委員

・北海道だけでなく、樺太・千島といった範囲でも説明されていることは了解したが、道内でも道東・道南といった地域色の差異を、私ども考古学の研究者は細かく見ている。国立アイヌ民族博物館では、その地域性というものをどのように考えているのか。

・先ほどの説明で、アイヌ語に標準語や共通語というものがなく、その場所のご出身で使われている言葉を展示の解説にしたということだったが、その辺についても少し詳しく教えていただきたい。

○鈴木研究員

・地域文化の差をどう表現するのかということでは、今回は壁面に土器を置いて、そこで少し地域的な差を表現してみた。北海道の話が中心にはなるが、本州、樺太、千島の話を入れ、また縄文土器に関しては北海道の中でも東と西の文化圏があるといったことは表現した。ただし当館の研究員から分かりづらいという意見もあり、短い解説文でどう地域差を表現するのかは今後の課題。

○佐々木館長

・民族資料の地域差ということでは、日本の博物館資料の一番悪いところで、収蔵庫にある資料の多くのものに情報がない。ただ北海道と書いてあるだけで、明ら

かに地域差があるのは分かるが、具体的にそれがいつの時代のどこの地域のものかということが分からないケースが多い。そのため、比較的詳しい情報が残っている海外の博物館の資料を見ながら比較して同定していくしかないかと考えている。分かっているものに関しては、〇〇地方のものと書いている。

・方言については、言語学者の人たちがそれぞれの地域差を克明に記録しており、また方言を勉強している方が各地に結構いることで、今回のアイヌ語の表記が実現できた。

〇蓑島委員

・まず、アイヌ文化期という枠組みをやめて、旧石器時代からを「私たちの歴史」と捉えたこと、要するに 13 世紀以降がアイヌ民族の歴史なのではなく、遡って広く捉えるというのは、ある意味すごく強い。一方で、最初からアイヌの歴史なんだと言い切っているかというと、多分そこには迷いがあるというふうにも伺っている。

・私は古代とか中世とかを積極的に使っている方だが、アイヌ文化期と言われた時代を、中世アイヌ文化期・近世アイヌ文化期などそのまま生かすと、「擦文や続縄文は古代だ」という形で、従来の時代区分をある意味生かしつつ、もう少し広いアイヌ史を構想できるメリットがある。

・私が今ヒントに思っているのは、岸本美緒先生の「近世化」という議論。アジア・ユーラシア規模で、それぞれは違う文化や歴史があるけれども、ある共通の状況、背景、課題に向き合う中でそれぞれ違ったものが生まれるのであって、共通の震源地みたいなものを共有しており、「近世化」ということが言えるのではないかと。アジア・ユーラシア規模に広げて古代や中世という概念を練り直すという意味で、ヒントになるのではないかと思っている。しかし、アイヌ民族にとっての古代や中世、近世という話になるのかどうかという問題はある。

・今回配布されている参考資料にもあるように、沖縄では貝塚時代・グスク時代・三山時代・琉球王国という独自の時代区分があり、安里進氏の解説も付いている。しかし私が５年ほど前に沖縄県博に行った時、館長は安里先生だったと思うが、貝塚時代がなく、奈良・平安並行のように、むしろ本土に合わせた時代区分を使っていた。そのあたりは、非常に立場が分かれると思う。

・安里先生の最近のご研究を見ると、沖縄の自生的な歴史の発展というものを想定するよりも、平安時代・鎌倉時代に喜界島が発展して、そこから農耕文化を持って移住した人が、グスク時代や琉球王国を作ったという見通しを書かれている。法政大学の吉成直樹先生の『琉球王国は誰が作ったのか』という最近の著書でも、琉球王国は従来、貝塚・グスク・三山・琉球王国と自生的な歴史として捉えられてきたけども、沖縄のナショナリズムの中でそういう歴史が出てきたのであって、実際には倭寇による征服王朝でないかと、かなり大胆なことが書かれている。

・私もアイヌ史を一貫した古い幅広い枠組みで捉えるという考え方には賛成だが、自戒を込めて言うと、沖縄史でも同様な試みのあとに学問的な問い直しがやはりあるわけで、そういった問い直しにどう堪えうる形で一貫したアイヌ史を構築していくかということが、大きな課題になっていると改めて感じた。

〇佐々木館長

・非常に重要な点を指摘していただいた。琉球史もそうだが、北海道史もそれ単独で歴史を構成しているわけではないというところ。琉球の場合、喜界島あたりの一族が津軽の安藤氏のような役割を薩摩で担っていたという説がある。北海道でも同じような時代に似た動きがあり、岸本先生の議論もそういうとこから出ているのではないか。
・ただしこれを考えるときに、日本列島の周辺だけで考えるのではなく、中国という巨大な太陽に併せて、その周辺の契丹や女真等も含めた形で全体の動きも見ていかないと、単なる言葉遊びになっていく可能性がある。
・アイヌ史に関しても、ユーラシアの東の広大な地域の中で位置付けていくのは大事だと思うが、しかしアイヌの人たちがどう考えているのかということが、今疑問点として残っている。私たちの研究成果をどういう形でアイヌ民族に還元して、彼ら自身が歴史を作っていくのにどういう働きかけをするということも、アイヌ史の場合には加味しないといけない。琉球の場合は琉球の人たちが自分たちでやった面があるので。

○蓑島委員

・おっしゃるとおりだと思う。

○川上委員

・お話を聞いていて、非常にご苦労されているということを感じた。私自身も古代や中世という用語は使ったり意識的に使わなかったり、いつも迷っている。旧石器からを対象にするとか、時代区分をしないとか、やはり通説的なものと分からないものとをミックスすると、こういうふうになるのかと感じた。
・そこで、「分からないことは分からない」とする方法はなかったのか伺いたい。「いまはこういう考えが通説的で、こういう考えもあるし別の考えもあって、全体としてはまだまとまっていないのだ」といったような、あいまいな展示はできなかったか。
・国立博物館なので、見方によっては国の主観というものが反映されるのか、あるいは博物館として独自の考え方があるのか。いずれにしてもいろいろな見方はある。展示の中であいまいなことを言うのは難しいかもしれないが、今後解説書を作ったり二次的に出されていく中でそういうことが出来ていくのかなとは思う。

○鈴木研究員

・そういう点でいうと、今回蓑島先生にも関わっていただいた蝦夷（エミシ）の展示はそれに非常に近い。今回の展示はあくまでイメージということで、実体化を避けたという経緯がある。逆に、国立では実体化の方もやってくれという意見もいただいている。
・分からないところを展示するということは、考古学のところでは非常に多いと思うが、どういうふうに言って展示するのがよいか、考えさせられるお話だった。

○松本委員

・今回の国立アイヌ民族博物館の展示構成は、国家の時代区分ではなく歴史を知るための材料に基づく展示構成だということを伺ったが、口承文芸の資料としての扱いについて伺いたい。歴史資料としての口承文芸の有効性についてどのようにお考えか、近世北海道史を書くうえで国立博物館の皆様のお考えを知りたい。

・もう一点、和人とアイヌという両者が出てくるのは、「交易権の拡大と縮小」という部分以降になると、そうした理解でよろしいか。

○田村室長

・口承文芸については、今回のオープン時の展示にはほとんど採用していない。私自身個人的に関心のある部分ではあるが、古代・中世などの用語は使わないという整理があり、特に「私たちの歴史」というコーナーは年表を軸にしている。口承文芸の中で語られることの歴史性を展示に反映させるときに、年表のどこに当てはめるかという点に関して、その落ち着きのなさを懸念したというのが、使用に消極的になった理由の一つ。積極的に排除したわけではないが、短時間で挑戦するのは難しかった。

・今後の大規模リニューアル、小規模な展示替え・資料替えの中で、口承文芸の歴史性の部分に関しても、例えば解説パネルを増やせるかどうかというのは議論すべきところかと思う。

○永野調査官

・二つ目の質問の、和人とアイヌの対立構図については、おっしゃるとおり 13 世紀以降、中近世以降のところで取り上げている。13 世紀以前の部分では、アイヌではなくいわゆる蝦夷（エミシ）について紹介するところで止めている。

○谷本小部会長

・開館してから 1 ヶ月程経過し、様々なご意見・ご批判、もちろん応援もあったと想像する。

・アイヌ文化期という用語を使わないことの理由に、先住権の問題との連動があると説明されていた。これから道史を編さんして行くにあたって、どのような形で表現していくかは慎重に考えていかなければならないと思っているので、具体的にどのようなご意見が寄せられたのか、差し支えのない範囲で教えていただきたい。

○田村室長

・先ほど先住権と言ったかもしれないが、先住民族の定義ということ。ウポポイはじめ国立アイヌ民族博物館が根拠にしているのは、2007 年 9 月の先住民族の権利に関する国連宣言、2008 年のアイヌ民族を先住民族とすることを求める国会決議、2009 年の政府による有識者会議の懇談会の報告書。それらを根拠にウポポイを作ることがスタートしており、博物館の基本スタンスはそこにある。

・そこでの先住民族の定義では、我が国がアイヌ民族が住んでいる土地に影響を及ぼした、その時点より前にアイヌ民族が住んでいたことが確認できると。そのことが、アイヌ民族を先住民族とする定義であるとされている。いつから住んでいるから先住民族だというのではなく、日本が北海道・千島を正式に領土にしたのは明治２年以降で､その段階でそこに先住していたということを根拠としている。

○佐々木館長

・その定義は国連決議と矛盾しないという保証があって、懇談会でそういった定義を行い、政府がそれに従ったもの。

○田村室長

・例えばその点についての意見の一例として、「道庁に確認したところアイヌ民族

の人骨が出土した最古は13～14世紀であると言われた。ウィキペディア等では、津軽安藤氏が本州から北海道に進出して、それ以降ずっと蝦夷支配をしていたと書かれている。だからアイヌ民族が先住民族と定義できるのは13～14世紀ですよね」というような質問というか意見があった。正確にはわからないが、その人骨の年代というのは、考古学のアイヌ文化期の年代を言っていると推測する。例えば11～12世紀だと擦文文化期の人骨になり、するとそれはアイヌではないということになる。

・そういう点が、やはり民族をかぶせた時代区分があることの弊害の一つで、それによって普通に暮らしているアイヌ民族に影響が行くようであれば、我々は避けようと。それがアイヌ文化期という用語を採用しなかった大きな理由。

・もう一つは、明治以降のアイヌ民族は、いわば同化政策の下で日本国民になった。これを望んでいたか望んでいなかったかということを、我々は試される。

　歴史上、いわばアイヌ民族のエリート層として文章を書いて残したような人たちは、特に大正・昭和初期には、「立派な日本人になって、差別されないような暮らしをしよう」と奮起鼓舞する記録を残している。また、戸籍の中で「旧土人給与地にて生まれる」というような記述があれば結婚や就職のときに差別の根幹になるので、そういった表現は積極的に戸籍から削除していこうという、アイヌ民族内部からの要求もあった。

　例えばそういう一部の歴史を捕まえて、「アイヌ民族が自らアイヌ民族であることの消滅を望み、日本国民になることを望んだのだから、今さらアイヌ民族を認める必要はない」という（いわゆるアイヌ民族否定論の）主張にもつながってしまう。私は特に近現代の担当だったので、そう受け取られない表現ということには努めて注意した。

・一番見落とされがちな論点は、アイヌ民族はアイヌだと表明していないにもかかわらず、「あの人アイヌだよ」と陰口を言われたり、アイヌだという理由で就職差別・結婚差別を受けたり、学校でいじめられたり、多くの場合、マイノリティは見つけ出されて差別されているという点。アイヌ民族が自ら民族を消して立派な日本人になろうとしたとしたら、やはりその裏では強烈な民族差別があったからであって、私も同化政策の記述では、その辺りは足りなかった部分があると反省している。

○谷本小部会長

・国立アイヌ民族博物館の先生方、どうもありがとうございました。たいへん貴重なご意見、差別や人権の問題、今を生きるアイヌの方々の問題も歴史と無縁ではないということが、私はよく理解できた。

　オープン後の大変お忙しいときに私どものために時間を割いていただいた。今日のご意見等を踏まえながら良い道史を構築していこうと思うので、今後ともご協力をお願いしたい。

（国立アイヌ民族博物館の方々ご退席。一時休憩後、再開）

（２） 時代区分について

○谷本小部会長

・国立アイヌ民族博物館の方々の実践、そのあとの反応をお話しいただき、こちら側からは先生方の貴重なご意見をお伝えして、それに対しても真摯に答えてくださった。これらも踏まえて、時代区分のことや叙述の計画を進めていきたいと思う。

・沖縄県の事例紹介については、川上委員からご提案いただき、事務局に準備してもらった。先ほどの議論の中で佐々木館長がおっしゃっていたが、沖縄県と北海道の違いは、北海道には先住民族のアイヌ民族がいること。日本全体でいえば沖縄県民はマイノリティだが、沖縄県では昔から沖縄に住んでいる方々のご子孫がマジョリティ。これが少し違うところだけれども、ただ、本州、四国、九州とは時代の区切りが違うということで言えば当然北海道と同じで、違った歴史の区分で考えなければいけない部分があるのは共通している。

・先ほど蓑島先生から、沖縄県博では本州・四国・九州の時代区分の「並行期」という形で時代区分が書かれているとのご指摘があった。これも回答の一つだと思うが、ではこの『クロニクル』でも「並行期」で進めることがよいのか、あるいは併用した方がよいのかなど、ウポポイでの実践や琉球沖縄の時代区分も検討材料に入れながら考えを進めていければと感じた。

○川上委員

・我々が生かすとすると、今日の議論と同じく、時代区分をどうしていくかということになる。国立アイヌ民族博物館は、時代区分をしないで年代順に追っていったと。ただ、歴史を編むときには、区切りというものがやはり必要だろうと私は思っている。この小部会で時代区分を作るのか作らないのか、作るとしたらどのようにしていくのかということが、今後の議論になってくる。

○蓑島委員

・「こういう立場に立ってこれを書いている」ということをどのくらい書くか、頁を割けるかという問題もあるという気がした。『沖縄県史』では、見開きで「こういういろいろな議論がある中で」と解説しているし、最近では『北見市史』が、従来型のアイヌ文化期といった設定をしつつ「今こういう議論があって、こういう立場でアイヌ文化期という言葉を使っている」と明示している。議論を実際に書いてしまうのか、手の内をさらさず何食わぬ顔で決めたことをやるのか、頁数の問題もあるが、そういうこともあるかと思った。

○越田委員

・今日のお話で気になったのは、『国立アイヌ民族博物館展示計画』（抜粋）の「６展示資料・手法について」や、田村室長の説明にもあった「考古資料・歴史資料・オーラル資料」という分け方のところ。

・北海道の場合、アイヌ文化期という用語は考古学の立場から出てきた。アイヌ文化期の文化構成要素、そこからそれと類似したものが出てくるのをアイヌ文化期という名称で呼んだのであって、最初は時代区分ということではなく考えられて

いた。それを文献史学で通史を書く人が取り込んで、アイヌ史の中でアイヌ文化期と使ってしまった、そういう背景もあると考えている。

・物質文化史学・文献史学という方法論が違う史学、それから口承文芸をどう取り扱うかという、この３つの立場を明らかにし、もう一度北海道史の時代区分を考えてみてはどうか。文献史学では古代・中世という用語はすごく大事だけれども、物質文化史学では、擦文土器を使った時代だから擦文文化期、鉄鍋や平地住居の時代だからアイヌ文化期と、こういう使い方でいいのかなと私は思っている。そうした立場に応じて、時代区分を括弧付けするとか、「並行」とするといった手法はあるかと思う。今の時点での私の拙い考えだが。

○中田委員

・国立アイヌ民族博物館の時代区分を作らないというお考えには、ちょっとびっくりした面もある。

・私の勉強した擦文文化、あるいは擦文文化期と使ってしまうけれども、まず普通の方はこの漢字が読めない。また発掘現場などで、「縄文中期は何年前ですか」ということもよく聞かれる。そうした暦年代、1000 年前なのか 5000 年前なのか、そういったことも、読んで分かりやすいということでは大事だと思う。

○松本委員

・先ほど、口承文芸について質問し、口承文芸は採用していないという答えをいただいた。時代区分はしないけれども年代性は大事にするという立場を聞いて、時代区分の必要性について考えさせられた。口承文芸を採用しないのは年代観を大事にするためかという点の確認をできたら良かったかと思う。

３　閉　会

○谷本小部会長

・これから考えていかなければならないことはたくさんあると感じた。今日はアイヌ民族を通して考えたときの話で、当然といえば当然だけれども、松前藩とか津軽安藤氏の話、近代に繋がっていく和人の歴史も、北海道史ということでは重要になってくる。

・主語の話があったが、北海道史の場合は何を主語にするのか。アイヌ民族を主語にすると、おそらく和人の歴史を書くときにけっこう気を使わなければいけなくなったりする。北海道史の叙述で何を主語に書いていくのか、地域を主語にするのかとか、これから皆さんと慎重に検討を進めていかなければならない。

・今後、年内にあと１度ぐらいは集まって、今日の話なども反芻しながら議論の場を重ねていきたい。

以上で小部会を終了します。

（以上）